

鴨東通信

ていーたいむ

若手研究者たちの挑戦

特別寄稿

『龍谷大学善本叢書』について
大取一馬

史料探訪 30

よみがえった戦国在地領主の甲冑
山内治朋

■私のノートから■

森有礼について、今、考える意味
長谷川精一

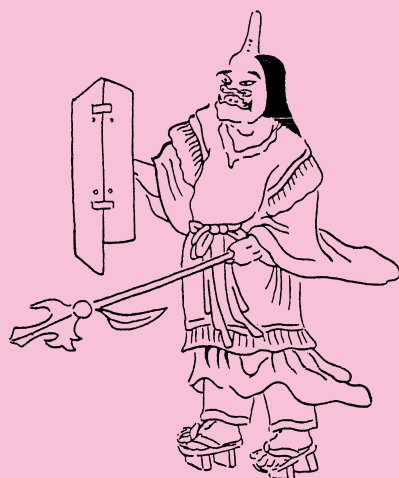
■人文科学の最前線■

関西大学アジア文化交流研究センター

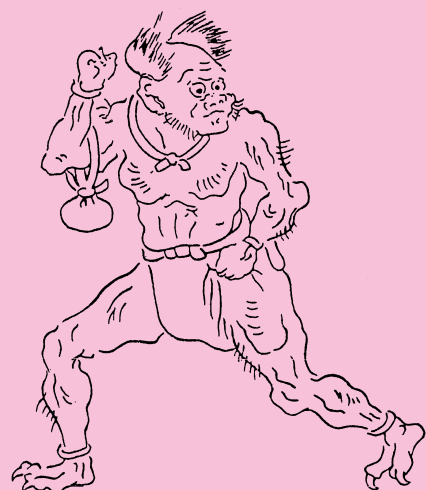
■新企画 源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第一回〉■

千年読みつがれた古典
伊井春樹

おうとうつうしん



秋



◎新刊案内◎

室町・戦国期研究を読みなおす

南都寺院文書の世界

東寺宝物の成立過程の研究

東寺百合文書(五)

系譜伝承論

東アジアの本草と博物学の世界(復刊)

陰陽道の神々

森有礼における国民的主体の創出

太平記

京都源氏物語地図

思文閣出版

若手研究者たちの挑戦

——今、なぜ研究史を「読みなおす」のか——

大田壮一郎(龍谷大学他非常勤講師)

尾下成敏(京都橘大学非常勤講師)

早島大祐(京都大学大学院文学研究科助教)

平出真宣(京都大学博士後期課程)

松永和浩(大阪大学博士後期課程)

三枝暁子(立命館大学講師) (50音順)

■研究会の発足と発展■

早島：今回の『室町・戦国期研究を読みなおす』の母体となった会が発足したのは、1999年に刊行された歴史学研究会編『越境する貨幣』（青木書店）と、その年の暮れに刊行された池上裕子さんの『戦国時代社会構造の研究』（校倉書房）の勉強会からでした。メンバーは、尾下さん・平出さんそして、私の3人でしたので、文殊の知恵にあやかろうと「文殊の会」と名付けました。2000年の初頭です。

尾下：そのころ関西で中世後期を専攻している若手は少なかったですね。

早島：関東の方が勢いがありました。桜井英治さんが1996年に『日本中世の経済構造』を出し、歴史学研究会の活動も活発でした。

平出：その後、『中世法制史料集 武家家法Ⅱ』（岩波書店）や勝俣鎮夫さんの『戦国法成立史論』（東京大学出版会）の勉強会をするなかで、次第に参加者が増えてきました。最初は16世紀を勉強しようとして始めたのですが、中世後期全体の勉強しようという雰囲気になってきて、京都大学の日本史研究室にとどまらず、よその大学の方とも一緒にやるようになって、合宿も行うようになりました。

早島：そのうち、この関西の若手のパワーをまとめて論集にしたいと考えるようになりました。何かテーマを絞って、論集といっても、ただの論文集でなくて、何かテーマを絞ったもののをと思いました。ちょうど90年代後半から2000年頭に、各社から日本史の通史ものが相次いで出ましたが、どこかの出版社も同じようなものを出しているように見え、そこで不足していた研究史整理が必要ではないかと思い始めました。



左：早島氏 右：尾下氏

■若手の熱意を反映するメンバー集め■

三枝：私は東京にしばらくいて、立命館大学に赴任してから、会に参加するようになったのですが、私ぐらいの年齢の人やそれよりも若い人の運営する研究会から論集が出るということ自体珍しいですよ。関西の状況を私個人の経験をふまえて振り返ってみると、研究者の数が多く、意外と同じ世代であっても接点のない場合があります。一体としてみれば非常に活気があって盛んであるかのように見えても、ひとつのグループを作って論集を出せるような感じではなかったと思います。

そうした意味で、論集の出版をすごいなあと思うと同時に、書く側もリスクを負うと感じました。関西の若手で論集を出すというときに、若い人だけでつくって論集を出すというリスクと、関西にいる人だけで出すというリスクの二つがあると思ったのです。新参者がけちを付けに来たと思われるのを覚悟しつつ、早島さんをたずねていきました。

早島さんは真剣に私の話を聞いてくれて、この論集に関してものすごい情熱をもっているのだということがよく分かりました。話をしているうちに、リスク云々ではなくて、競争が激しくて成果主義が若手に及びつつある現状のなかで、一生懸命研究をしている人はたくさんいて、そういう若手の熱意を反

映できるようなメンバーを東西限らずそろえるべきではないか、と考えるようになったのです。

早島：そういう過程で、以前から注目していた西島太郎さんや清水克行さん、桃崎有一郎さんに、メンバーのつてを使って声をかけ、結果的に広がりのある内容となりました。

三枝：皆さんすぐ承諾して下さいましたね。どなたか著名な先生が編者になって、研究会の論集を出すというのではなく、先行研究を踏まえつつ、若手が共に平等にリスクを負いながら新しい試みをするという企画になったと思います。

■南北朝期の充実■

早島：桃崎さんと松永さんの研究対象がかさなっていましたよね。

松永：落とされるのではないかと考えていました(笑)。精一杯やれることをやっただけです。

早島：結果的に南北朝期で二つの論文が出ましたが、これはよかったです。この論集を企画している二年ぐらいの間にお二人がどんどん業績をだされた。論集のトップバッターにふさわしいと思います。

研究会では様々な驚きがありました。例えば、南北朝期に武家が朝廷の権限を吸収するという、佐藤進一さんの室町幕府論の軸である「権限吸収論」については、現在の研究状況に照らすとちょっと無理があると私自身も感じていたのですが、私より年下の松永さんなどがもっと過激に批判していて、びっくりしました。

また、守護権の問題で、文書が一通出ていたらその国に関する守護、という極端なとらえ方もあったのですが、それに対する異議が山田徹さんなどから出てきた。それはすなわち、文書の帰納と演繹の仕方という、文献史学の根幹に関わることです。私も若手ですが(笑)、その下の若い人は、そこまでラジカルに言うのかと思って、正直勉強になりましたね。

尾下：室町幕府の初期を扱った論考が充実していると思いました。それにくらべると後の方はすこしさびしいですが(笑)。それは今の研究の状況を多分に反映しています。南北朝・室町期の研究はこのところすごく発展して、10年前とは隔世の感があります。私たちのやっている時代は、研究があまりすすんでいないという裏返しかも知れないですが(笑)。

研究者と論文の数が増えていて細分化が著しいですね。江戸時代をやっている人から見ると、戦国・



左：松永氏 右：三枝氏

織豊期というのは立ち入りにくい分野みたいです。豊臣政権の研究でもいろんな分野があって、一人の研究者がそれらをまとめるというのは難しい。そうなるとうなるかという、誰のどの説を踏まえて議論すべきかだんだん分からなくなってくるのです。この論集はそういう意味でその辺を勉強しなおすいい機会だったと思います。

早島：中世後期研究会という名前が付いていますが、自分は室町研究者だから室町しかないというのではなく、前の時代や後の時代も限界を作らないでやっていこうとしました。結果、前の継ぎ目である南北朝が充実したということです。

■室町幕府が成立した意味■

尾下：桃崎さんや清水さんみたいに研究史解説型、つまり何故この問題を取りあげるのかという視点から書いたものもあれば、自分の主張を出した書き方もありましたね。

早島：われわれのいう「オレが」型ですね(笑)。大田さんのものとか。

大田：(笑) 本当は研究史解説型がいいかなと思ったのですが、書いているうちに変わってきました。政治史の方は佐藤さんや富田正弘さんという、先行研究の壁がありましたが、中世後期宗教史には乗り越えるべき壁がない。本当はあるのかも知れませんが、私には見えない(笑)。

今のところ、原田正俊さんが包括的にされているので、それを解説する形で話を進めたのですが、結局、佐藤さんや富田さんの政治史の議論が宗教史の枠組みを規定していたことを強調し、幕府論として自分の議論をかませっていく方向を考えました。

早島：論集全体としては、いろいろな分野における室町幕府が成立した意味が浮き彫りになったような気がします。

三枝：私は今回身分制論を書いたのですが、旬の研究に対峙できる身分制論、つまり他の研究関心を持っている人たちでも身分制に関心を持ってくれるような議論を展開したいと考えたときに、逆に他の人が問題にしている都市とか幕府とか、そういうものと切り結ぶ装置が必要だなと思っていました。そのことが、室町幕府が成立したことの意味を身分制の中で論じ直すことにつながったと思います。

大田：宗教史研究では、そもそも幕府と宗教というテーマ自体が、テーマとして出ようがない素地があります。先ほどの話とは逆に、私の印象では、90年代後半ぐらいから、中世後期に関心を持つ学生が増えてきました。そういう中で、仮説をたててその筋から議論をしていくという方法をとらないと、祭りの後は何も残りませんでした、ということになるのではないかという危機感があります。

背伸びした感じはするのですが、議論の方向性を示したかった。それを次の方が批判してくれたら次の段階に行くだろうと。つまり早めに言った方が勝ちということですが（笑）。筋や論を踏まえて議論をしていかないと、宗教史はどんどん小さくなっていくのではないかと思います。

松永：今までは幕府の存在が朝廷にとっては否定的な意味でしか捉えられていなかった。そこで幕府の成立期からその時代をとりあげて、幕府の政治の中での朝廷の位置を描こうとしました。室町幕府ができたことによって、新しい公武関係の展開が生まれてきたと思うのです。

早島：公武関係史にしても、身分制論にしても、中世後期の宗教史にしても、今まで完全に議論が止まっていた面がありました。それが結果的に幕府が出来た意味を軸に置くことで再起動しだしたという印象を受けました。他の分野でもそういう動きが出てきてこれが一つの流れになるのかなと思います。

平出：「都鄙関係を読みなおす」というのも大きなテーマで、南北朝期から織豊期までを、中央と地方でばらばらにやることを克服しようという流れは、今強いと思うのです。室町幕府がこんなにすごかったという話ではなくて、守護の内実をもう一回考え直すことから、幕府を相対化し、都鄙関係を論じるなど、あきらかに佐藤さん以来の枠組みとは距離をとる動きが出てきています。

戦国期では、今岡典和さんが幕府守護体制論を出されたけれども、幕府が各地域の支配を保証すると



左：平出氏 右：大田氏

いう内実に関しては、もうちょっと違った手法で考えなければいけない部分があり、その際は佐藤さんも問題になるのだと思いますが、そういう点も必ず進んでいくのだらうと思います。

■若手が研究史整理をするメリット■

尾下：あとは村の研究がないのが残念ですね。古代史や近世後期をやっている人からみれば、15・16世紀の村落論は注目すべきものらしいけど、結局関東はともかく、関西でそういうことをやっている人は少ない。そういう人をつかまえることができなかったですね。早島：確かに残念でした。ただ、こういう本を出すときはつついバランス重視になって、書き手の個性をなくすこともあります。むしろこの論集は人の体臭を感じるくらいで、若手ならではの勢いをそがないようにしました。この点は本書の売りです。

三枝：この論集が契機になって、戦後歴史学を支えてこられた世代と対話ができたらいいと思います。早島：70年代後半から80年代にかけてマルクス主義が崩壊して研究史の断絶ができたというのはよく言われるのですが、その断絶が埋められないまま21世紀に来てしまった。それをマルクス一人のせいにならずに、今その辺をしっかりとつなぐ努力をしないと危ないのではないかと思います。

もちろん、自分の軸足も定まっていらないのに先行研究を切るな、という批判はあるでしょう。ただ、自分が40代50代になってこういう先行研究整理の仕事をするかという、かなりあやしい（笑）。

読みの浅さ・薄さはあるかもしれませんが、若いときの方が上の人や同時代の人のものをよく読むというのも事実だと思うのです。若手が研究史整理をするというメリットもあるのです。厳しいご時世の若手の頑張りを見ていただければと思います。

（2007.9.6 於：思文閣出版）

室町・戦国期研究を読みなおす

中世後期研究会 編

〔最新刊〕

踏まえる、拓く——若手研究者が提示する研究の過去・現在・未来

I 政治史を読みなおす

〔1 公武関係を読みなおす〕

南北朝・室町期における公家と武家——権限吸収論の克服——

松永和浩（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

室町殿の朝廷支配と伝奏論——〈公武統一政権〉論の再考に向けて——

桃崎有一郎（日本学術振興会特別研究員）

〔2 都鄙関係を読みなおす〕

南北朝期の守護論をめぐる

山田 徹（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

室町幕府による都鄙の権力編成

吉田賢司（帝京大学文学部専任講師）

戦国期政治権力論の展開と課題

平出真宣（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

織田・豊臣政権下の地域支配——「一職支配」論の現在——

尾下成敏（京都橘大学非常勤講師）

II 社会史を読みなおす

中世後期の在地領主研究

西島太郎（中部大学人文学部非常勤講師）

習俗論としての社会史

清水克行（明治大学商学部専任講師）

中世後期の身分制論

三枝暁子（立命館大学文学部講師）

III 経済史を読みなおす

ものもどるのか——中世の融通と徳政——

早島大祐（京都大学大学院文学研究科助教）

比較中世都市論への視点——西欧・イスラム・日本——

高谷知佳（京都大学大学院法学研究科准教授）

IV 宗教史を読みなおす

室町幕府宗教政策論

大田壮一郎（龍谷大学・立命館大学他非常勤講師）

戦国期宗教勢力論

安藤 弥（同朋大学専任講師）

▶ A5判・420頁／定価4,830円

ISBN978-4-7842-1371-9

南都寺院文書の世界

勝山清次 編

〔最新刊〕

東大寺宝珠院（法華堂文書・宝珠院文書）と興福寺一乗院坊官二条家（一乗院文書・一乗院御用日記）に伝来した文書の3年間にわたる調査・研究の成果をまとめた一書。多くは、これまで利用されていなかった文書を用いた論考であり、東大寺・興福寺を中心とした南都寺院の寺領やネットワークに関する研究を展開する。論考8編と史料翻刻3篇収録。

◎内容目次◎

【第I部】宝珠院文書の世界

東大寺宝珠院伝来文書の概要

（徳永誓子）

伊賀国条里制の二つの問題

（勝山清次）

嘉暦年間における長洲訴訟記録について

（久野修義）

摂津国長洲莊悪党と公武寺社

（熊谷隆之）

乾家と法華堂領荘園

（早島大祐）

【第II部】興福寺とその周辺

正安二年興福寺供養会にいたるまで

（小原嘉記）

興福寺大行事職考

（梅田千尋）

江戸時代における医師の僧位叙位手続き

（鍛冶宏介）

【第III部】史料翻刻編

覚英訴訟上洛日記

（久野修義）

覚英訴訟上洛日記紙背文書

（久野修義）

摂津国長洲莊悪党関係史料

（熊谷隆之）

▶ A5判・350頁／定価6,090円

ISBN978-4-7842-1369-6

中世寺領荘園と動乱期の社会

熱田 公 著

思文閣史学叢書

中世畿内における荘園研究の先駆者の一人である著者が遺した主要な業績を4部構成でまとめる。高野寺領荘園支配の確立過程・紀州における惣の形成と展開・室町時代の興福寺領荘園について・中世大和の声聞師に関する一考察など全16篇・付論1篇を収録。

▶ A5判・540頁／定価9,450円

ISBN4-7842-1203-5

中世日本の政治と文化

森 茂暁 著

思文閣史学叢書

鎌倉時代から室町時代にかけて、現存している古文書や、政治と深く関わった宗教者から、「中世日本」とはどのような時代だったのかをひもとく。中世の政治と文化を総合的に明らかにした論考15篇を収録。

▶ A5判・480頁／定価9,450円

ISBN4-7842-1324-4

中世寺院社会の研究

下坂 守 著

思文閣史学叢書

中世社会においてその活動を総体的には把握しようとされてこなかった比叡山延暦寺を主たる対象とし、惣寺を基盤として形成されていた寺院社会、ひいては中世社会の本質を探る、著者初めての論文集。

▶ A5判・598頁／定価10,290円

ISBN4-7842-1091-1

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

【11月刊】

南北朝時代の寺誌である『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの豊富な史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。今後の文化財の活用や保存を前提に、本来の保管形態を復元し、伝来を確定して位置付けをします。

カラー口絵4頁・本文挿図80点

第1部 東寺の宝物と『東宝記』

- 第1章 東寺の伽藍と『東宝記』
 - 第1節 東寺の境内について
 - 第2節 東寺の伽藍の分類
 - 第3節 東寺の伽藍の歴史と現状
 - 第4節 東寺寺家伝来の宝物について
- 第2章 東寺宝蔵の宝物と『東宝記』
 - 第1節 宝蔵の歴史
 - 第2節 宝蔵の宝物目録について
 - 第3節 宝蔵の宝物について
- 第3章 東寺西院御影堂の宝物と『東宝記』
 - 第1節 西院御影堂の歴史
 - 第2節 西院御影堂の宝物目録について
 - 第3節 西院御影堂の宝物について
- 第4章 東寺の安置聖教と『東宝記』
 - 第1節 東寺の經典類・聖教類の分類
 - 第2節 東寺の經典類・聖教類の目録について
 - 第3節 東寺の經典類・聖教類の伝来と現状



第2部 東寺宝蔵の宝物の伝来と現状

- 第1章 東寺宝蔵の宝物の成立過程
 - 第1節 宝蔵の宝物目録について
 - 第2節 平安時代の宝蔵とその宝物
 - 第3節 鎌倉時代の宝蔵とその宝物
 - 第4節 室町時代の宝蔵とその宝物
- 第2章 東寺宝蔵の宝物の管理と保存
 - 第1節 宝蔵の宝物の特色について
 - 第2節 宝蔵の宝物の管理について
 - 第3節 宝蔵の宝物の保存について

第3部 東寺西院御影堂の宝物の伝来と現状

- 第1章 東寺西院御影堂の宝物の成立過程
 - 第1節 西院御影堂の宝物目録について
 - 第2節 西院御影堂の成立とその宝物
 - 第3節 西院御影堂の興隆とその宝物
 - 第4節 西院御影堂の焼失・再建とその宝物
- 第2章 東寺所蔵『弘法大師請来目録』の伝領過程
 - 第1節 『弘法大師請来目録』に関する従来の見解
 - 第2節 『弘法大師請来目録』の伝領過程
 - 第3節 『弘法大師請来目録』にみられる痕跡と消された文字
 - 第4節 最澄の書写奥書を消した事情

にいみ・やすこ…1968年広島県生まれ。立命館大学文学部史学科日本史学専攻卒業。東寺宝物館学芸員。

▶A5判・630頁／定価12,600円

ISBN978-4-7842-1368-9

東寺百合文書

【第1期全10巻】

京都府立総合資料館編

総数18,000点・27,000通におよぶ国宝「東寺百合文書」から『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

【既刊5冊】A5判・平均450頁（ISBN4-7842）

第1巻イ函・口函一 定価9,975円（-1182-9）

第2巻口函二 定価9,975円（-1224-8）

第3巻口函三 定価9,975円（-1266-3）

第4巻口函四・ハ函一 定価9,975円（-1319-8）

【最新刊】第5巻ハ函二

定価9,975円（ISBN978-4-7842-1364-1）

佐々木六角氏の系譜 系譜学の試み

佐々木 哲 著

これまで作為や錯誤が多いことから歴史資料として用いられなかった系図について、作為や錯誤を隠喩ととらえ、そのもとになった史実を明らかにする試み。

▶46判・200頁／定価2,310円 ISBN4-7842-1290-6

京都文化の伝播と地域社会

源城政好著

【思文閣史学叢書】

京都とその近郊の中世文化史に取り組んできた著者が、今までの成果をまとめた一書。在地（荘園）をめぐる動向、公武の文芸交流と伝播、さらに河原者・声聞師の被差別民衆の諸相と室町・戦国期の人物論を収めた。

▶A5判・400頁／定価8,190円 ISBN4-7842-1325-2

戦国期関東公方の研究

阿部能久著

【思文閣史学叢書】

関東府の長である関東公方権力の戦国期から江戸期初頭にかけての諸問題の解明に取り組む。公方発給文書の様式変化にみる権力構造の実態、鶴岡八幡宮・鐙阿寺や禅宗・一向宗などの寺社勢力との関係、関東公方家の後裔である喜連川家の幕藩体制下の位置、さらに武家故実書『鎌倉年中行事』の成立背景を探る。

▶A5判・320頁／定価5,985円 ISBN4-7842-1285-X

系譜伝承論

佐々木六角氏系図の研究

佐々木 哲 著

【最新刊】

系図に作為や錯誤が生み出された背景まで探求し、常識にとらわれず資料を読むことで、室町・戦国期における佐々木六角氏の果たした役割の大きさを明らかにする。前著『佐々木六角氏の系譜』で確立した著者独自の視点から、佐々木六角氏を縦軸として室町・戦国期の諸勢力の動向を論じる。挿入系図多数。

序論 歴史学方法論／1章 沢田源内と六角氏郷／2章 六角義実の研究（六角四郎／義久という人物／義久の出家／義久の贈官／系譜伝承における錯誤と史実）／3章 六角義秀の研究（『お湯殿の上の日記』と六角亀寿／元服後の六角亀寿／義秀に関する文書／江州殿と信長の上洛／元亀争乱／足利義昭政権と元亀争乱）／4章 六角義堯の研究（六角義堯と近江武士／武田勝頼と六角義堯／上杉謙信と六角義堯／毛利氏と六角義堯／六角義堯の軍事行動）／5章 六角義郷の研究（義郷の母織田氏／義郷と武衛義康／豊臣秀次の与力左衛門督殿）／おわりに——歴史哲学へとつづく終章 ささき・とおる…1961年東京生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。専門は歴史学・哲学。

▶46判・350頁／定価3,990円

ISBN978-4-7842-1370-2

東アジアの本草と博物学の世界 [上・下]

山田慶兒 編

【10月復刊】

18世紀、西洋の博物学の背景には大航海による世界の拡大と東洋貿易・植民政策があり、日本の本草の土壌となったのは吉宗の全国産物調査をはじめとする幕府や諸藩の殖産政策と外国貿易であった。東の本草と西の博物学は日本で遭遇する。物にそそがれる新しい眼の誕生、物のかぎりない多様性の発見であった知的冒険が、どのような展開をとげたのか、その諸相をさぐる。初版1995年

【上巻】

1 分類 本草における分類の思想（山田慶兒）／植物の属と種について（木村陽二郎）／東アジア本草学における「植虫類」（西村三郎）

2 記述 幕府典薬頭の手記に見える本草（宗田一）／日本における救荒書の成立とその淵源（白杉悦雄）／清朝考証学派の博物学（小林清市）／漢訳本前期密教経典にあらわれた医療関連記載（正木晃）

3 描写 秘伝花鏡小考（塚本洋太郎）／十八世紀の植物写生（榊原吉郎）／江戸時代動物図譜における転写（磯野直秀）

【下巻】

4 施策 徳川吉宗の享保改革と本草（笠谷和比古）／享保改革期の朝鮮薬材調査（田代和生）／徳川吉宗の唐馬輸入（大庭脩）／江戸時代の鳥獣とその保護（安田健）

5 渡海 本草学と植物園芸（白幡洋三郎）／海峡の植物園—ペナンとシンガポール（川島昭夫）／イスラム圏の香料薬種商（三木亘）

6 考証 生薬の変遷 常山について（桜井謙介）／小野蘭山本草講義本編年攷（高橋達明）／稻生恒軒・若水の墓誌銘について（杉立義一）

7 企図 『本草綱目』を読むためのコンピュータツール（小野芳彦）

▶（上巻）A5判・360頁／定価7,875円
（下巻）A5判・372頁／定価7,875円

ISBN4-7842-0883-6
ISBN4-7842-0885-2

原 淳一郎著

近世寺社参詣の研究

最新刊

「寺社参詣」という行動様式そのものを研究対象の根本にすえ、江戸時代に隆盛を迎えたさまざまな寺社参詣の広がりをも思想的・文化史的立場から位置付けた一書。

目次 第1章 近世寺社参詣における御師の役割／第2章 参詣と巡礼／第3章 相模大山への参詣意識と書物に描かれた世界／第4章 寺社参詣の大衆化／第5章 文人層の参詣世界の大衆化／第6章 鎌倉の再発見と歴史認識・懐古主義／第7章 成田山新勝寺の経営と宣伝活動／第8章 淡島信仰にみる都市の医療と信仰／第9章 伝承成立の歴史的考察と宗教的介入者

▶ A5判・416頁／定価6,615円

ISBN978-4-7842-1363-4



江戸時代唐船による日中文化交流

松浦 章著

鎖国政策下の江戸時代において日中文化交流の大動脈を担った「唐船」について、日中双方の史料を用いて多角的に論じる。

▶ A5判・472頁／定価9,450円 ISBN978-4-7842-1361-0

近世長崎・対外関係史料

太田勝也編

近世の長崎町方や対外関係に関する史料4点（長崎御役所留・長崎諸事覚書・長崎記・長崎旧記）を活字化。詳細な注と解題を付す。

▶ A5判・680頁／定価16,800円 ISBN978-4-7842-1362-7

朝鮮通信使の研究

李 元植著

江戸時代、日本と朝鮮の善隣外交において、その根幹をなしていた朝鮮通信使——彼らが訪日して果たした重要な役割を、政治外交と文化交流の両側面から捉える。

▶ A5判・736頁／定価15,750円 ISBN4-7842-0863-1

十九世紀日本の園芸文化

平野 恵著

江戸と東京、植木屋の周辺

近世後期から明治前期、19世紀における園芸文化史を江戸・東京を中心に叙述。本草学・見世物研究、文芸分野を視野に入れた意欲作。図版70余点。

▶ A5判・544頁／定価6,825円 ISBN4-7842-1292-2

本草学と洋学 小野蘭山学統の研究

遠藤正治著

【徳川賞受賞】

日本本草学の頂点、小野蘭山の学統を考察の対象にし、洋学の影響を受け国際的視野を備えた博物学的な本草研究の実態を探り、わが国最初の近代的植物図譜『草木図説』誕生の環境を明らかにする。

▶ A5判・400頁／定価7,560円 ISBN4-7842-1150-0

牧野標本館所蔵の

シーボルトコレクション

加藤億重著

東京都立大学牧野標本館所蔵のシーボルトコレクションを約10年間にわたって精査してきた成果。

▶ A5判・294頁／定価5,670円 ISBN4-7842-1165-9

関西大学アジア文化交流研究センター 文部科学省学術フロンティア推進事業 「東アジアにおける文化情報の発信と受容」

薄 培林

関西大学アジア文化交流研究センターPD研究員



センターの外観(関西大学以文館)

関西大学アジア文化交流研究センターは、東西文化交流研究および中国を中心とするアジア文化研究において卓越した研究業績を蓄積してきた関西大学東西学術研究所のもとに設立された研究組織である。二〇〇五年四月に文部科学省学術フロンティア推進拠点に選定され、「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマとする五年間の共同研究プロジェクトを遂行することとなった。

このプロジェクトの研究目的は、東アジアにおける文化交流の諸相を、中国文化に軸足を置きながら掘り下げて文化交流研究の新しいディシプリンを構築することであり、本センターに置かれている言語文化、思想儀礼、交流環境の三つの研究班の共同作業として遂行している。言語文化班は、近代における「西学東漸」と言われる現象を、

言語、文化芸術、科学、印刷出版といった様々な側面から取り上げてその伝播の方法、受容の形態を明らかにしている。思想儀礼班は、東アジア世界において巨大な文化パラダイムとして存在しつづけた儒教を中心に、儀礼とその思想に重点において研究を進めている。交流環境班は、東アジア諸地域の文化交流の内容及形態を規定している歴史的條件を解明し、歴史的環境の差異が中国との文化交流や相互認識にどのように反映しているのかを究明している。

本センターは、中国の典籍一万種

全文の総合データベースである世界最大規模の「中国基本古籍庫」を日本の他の大学に先駆けて導入した。さらに稀覯書の文字データ・版本画像を含む独自の連結データベース「近代漢語文献データベース」も構築中である。それらと関西大学の豊富な学術資源とを生かして活発的に研究活動を行っている。また、二〇〇七年度からスタートしたグローバルCOEプログラムにおいて、本学が申請したプログラム「東アジア文化交渉学」が採択された。従来の一国主義的な東アジア文化交渉学の創出が採択された。従来の一国主義的な東アジア文化交渉学を革新し、新たな学問領域としての「文化交渉学」を世界に先駆けて構築するのが目的の一つであるが、本センターはその有力な研究基盤である。

交流環境班に所属している筆者は、主に近代以来の日中交渉の様相及び日中両国の相互認識の究明に携わっている。明治日本の啓蒙思想家の中村正直を一つの事例として、中村の中国認識、近代日中知識人の思想的・文化的交流における中村の役割とその活動について原史料をつきあわせつつ検証してきた。また、アヘン戦争以来の清政府の対日外交政策及び李鴻章をはじめとする外交要人の対日観を分析することによって、近代の日中関係・両国の相互認識を規定する政治環境を解析している。

アジア文化交流センターの研究成果は、プロジェクトメンバーの専門研究書や研究紀要『アジア文化交流研究』で情報発信している。研究活動状況や研究成果報告の詳細について、ニューズレター『環流』またはホームページ(<http://www.csac.kansai-u.ac.jp/>)を参照願いたい。

おんみょうどう
斎藤英喜著 **陰陽道の神々** 佛教大学鷹陵文化叢書 17 **最新刊**

疫鬼や式神、泰山府君、牛頭天王、八王子、金神、盤牛王、そして式王子、呪詛神たち…。彼らは近代社会が封印し、消去した「陰陽道」の神々である。本書は、知られざる陰陽道の神々の来歴と素顔を、最新の研究成果にもとづき、平易に説きながら、もうひとつの「日本」の神々の世界を探求する。

掲載写真・図版多数

はじめに —もうひとつの「日本」の神々を求めて—

序 章 陰陽道と安倍晴明の基礎知識

〔陰陽道〕の定義／国家のトップシークレットと「陰陽寮」／安倍晴明は「陰陽師」なのか ほか

第一章 追われる鬼、使役される神—疫鬼と式神—

1 鬼を追う陰陽師（「福は内、鬼は外……」の謎／追儺儀礼の現場から／陰陽師が誦む「祭文」とは ほか）

2 「式神」という神（式神とは何か／『枕草子』のなかの護法／護法童子は術者の力のバロメーター／式神は「陰陽道」の知識とどう関わるのか ほか）

第二章 冥府と現世を支配する神

1 冥府神としての泰山府君（泰山府君とコンタクトする晴明／史料のうえの泰山府君祭 ほか）

2 変貌していく泰山府君（泰山府君祭の多様化／鎌倉幕府の陰陽師と泰山府君／天曹地府とは何か／陰陽道の「繁栄」の時代？）

第三章 牛頭天王、来臨す

1 牛頭天王を求めて（祇園祭の祭神の本当の名前は／「祇園社」と「牛頭天王」をめぐる歴史 ほか）

2 中世神話としての「祇園牛頭天王縁起」（「祇園牛頭天王縁起」の物語、紹介／「吾は速須佐雄の神ぞ」／誰が牛頭天王＝スサノオ説を作ったのか ほか）

3 牛頭天王、陰陽道の神へ（牛頭天王と天刑星／「太山府君王法」を破る／「五節の祭礼」と「二六の秘文」 ほか）

さいとう・ひでき…1955年東京生まれ。法政大学文学部卒業。成城大学大学院修士課程修了。日本大学大学院博士課程満期退学。現在、佛教大学文学部教授。

第四章 暦と方位の神話世界—『簠簋内伝』の神々—

1 『簠簋内伝』という謎（土御門家が否定した書物／作成者は祇園社の社僧か／『簠簋内伝』の構成、その成立過程／暦注書としての意味 ほか）

2 暦世界の根源神へ（宇宙創成の光景から／五帝龍王たちは何を生み出したか／暦世界の根源神＝盤牛王／もうひとつの黄帝黃龍王譚 ほか）

第五章 いざなぎ流の神々

—呪詛神と式王子をめぐる—

1 いざなぎ流の神々と陰陽道（家に祭られる神たち／天井裏の聖域へ／グループ神としてのオンザキ ほか）

2 「呪詛神」の系譜から（「呪詛の祭文」の世界／「取り分け」はどのように行なわれるか ほか）

3 式王子の世界（式王子のふたつの系統／式王子となる神霊たちとは／「大荒神のけみだし式」でシフトする荒神／法文＝式王子をいかに使うのか ほか）

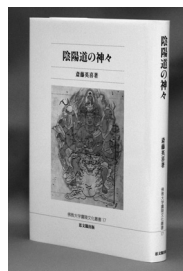
終 章 「陰陽道」の神々のその後
標的とされた牛頭天王／陰陽道の神々は何を語っているのか

断章 1 いざなぎ流への〈旅〉

断章 2 安倍晴明ブームの深層へ

▶ 46判・320頁／定価2,415円

ISBN978-4-7842-1366-5



八瀬童子 歴史と文化

宇野日出生著

八瀬童子の苦難にみちた激動の歩み、そして今に伝わる思想・行動を歴史に裏付けられた「文化」としてとらえた一書。掲載図版87点。



▶ 46判・210頁／定価1,890円 ISBN978-4-7842-1352-8

上賀茂のもり・やしろ・まつり

大山喬平監修／石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編
神社所蔵の約14,000点の文書が重要文化財に指定されたことを記念して、同社主催の歴史文化講座の成果をまとめ、上賀茂神社をめぐる神事・歴史・文化をわかりやすく紹介。

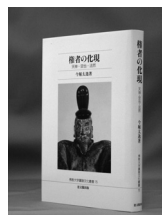
▶ A5判・412頁／定価2,940円 ISBN4-7842-1300-7

古代日本の輝き

上田正昭著

日本の歴史と文化を支えている「古代的精神・古代的要素」とはなにか—広くアジア史をも視野に入れて折口民俗学を継承する著者が喜寿の節目にまとめた一書。

▶ 46判・300頁／定価1,785円 ISBN4-7842-1167-5



**ごんじゃ けげん
権者の化現**

天神・空也・法然

佛教大学鷹陵文化叢書 15

今堀太逸著

日本国の災害と天神・六波羅蜜寺の信仰と空也・浄土教の布教と法然伝の3部構成で、仏・菩薩が衆生を救うためにこの世に現れた仮の姿について明かす。

▶ 46判・312頁／定価2,415円

ISBN4-7842-1321-X

丹後地域史へのいざない

上田純一編

政治・経済史的観点からだけでなく、地域住民の視点から、そして彼らの抱いていた歴史的な帰属意識や時代心理の分野にまで言及した全7篇を収録。

▶ 46判・184頁／定価1,680円 ISBN978-4-7842-1348-1

病いの克服 日本痘瘡史

川村純一著

古代より人類を苦しめてきた痘瘡（天然痘）は、1796年ジェンナーの牛痘種痘法を経て、1980年WHOによりその根絶が宣言された。膨大な史料からその歴史を描き出す。

▶ 46判・400頁／定価4,935円

ISBN4-7842-1002-4

●私のノートから●

森有礼について、今、考える意味

長谷川精一

森有礼が伊勢神宮での「不敬」行為を理由として明治憲法発布の日の朝に国粹主義者に刺された時、森は42歳、内閣最年少の大臣として、文部行政の責任者の地位にあった。森は薩摩藩留学生に選ばれ渡英の後、米国で新興宗教団体・新生社に入り修行。帰国後、明治政府に出仕。議事体裁取調御用、米国代理公使等、官途を歩む一方で、『日本の教育』、『日本における宗教の自由』等の英文の著作を刊行し、また日本初の啓蒙団体「明六社」を結成。「妻妾論」を発表し、婚姻契約を交わして結婚。清国公使、英国公使となり条約改正交渉に努め、憲法調査のため渡欧していた伊藤博文とパリで教育問題について意見を交換。伊藤は元田永孚ら宮中派等の反対を押しきって森の入閣を決定し、その後、不慮の死を遂げるまで森は自己の教育政策を展開することとなる。

森に対しては、その自由主義的・進歩的傾向と文部大臣となつてからの国家主義的傾向との関係をどのように理解するかをめぐって、大きく異なる評価がなされてきた。森研究者のひとりであるI・ホールは、森評価の変遷を、「非難すべき欧化主義者」（森の生前、そして暗殺後に彼を「不敬漢」とした見方）、「賞賛すべき国家主義者」（森の死後、国体教育主義者として彼の復権を企てた井上毅に代表される見解）、「非難すべき国家主義者」（森の国家主義的傾向を批判する戦後の見解）、「賞賛すべき欧化主義者」（「新生社」に関する林竹二の研究以降の森の自由主義的側面の再評価）という4つの像にまとめている。森の思想と行動を統一的に理解するためには、果たしてどのような見方が必要なのか。

森は井上毅に、自分は道路を歩いても、また人力車に乗つても、この車夫の頭には日本という脳髓があるのかと想像すれば誠に心細い感情が起ると語つたという。森が課題としたのは、日本という国家を構成する自覚的な主体Ⅱ「日本国民」であることを自ら切望する「国民」を創出することではなかっただろうか。こう考えるとき、具体的に解明すべき論点として、次のような問いが浮かび上がってくる。

*近代的な「主体」の形成という点からみたとき、森の新生社での禁欲主義的な修行と、「道具責め」と称された後の彼の師範学校政策とはどのような関連するものなのか。

*先行研究において、森の外交意見と外交活動はアジア諸国に対しても「条理」に基づくものであったとされてきたが、それは本当なのか。

*森は日本語を廃止して英語を採用する論を主張したとされ、「言語的売国奴」と非難されてきたが、森の真意はどこにあったのか。

*森は日本の歴史に関していかなる見解をもっていたのか。

*森は「修身科」を「倫理科」に変え、「自他並立」を説く『倫理書』を編纂したが、彼はどのような道徳教育が望ましいと考えていたのか。

*森は能力不平等論に基づいて通常の代議制民主主義を認めない政治制度を考案したが、それはいかなるものであり、森の意図は何だったのか。

*森は万世一系の皇室が我が国の「無二の資本至大の宝源」であると述べる一方で、「不敬」行為を理由として暗殺されたが、彼はどのような天皇観をもっていたのか。

このたび刊行の機会をいただいた拙著『森有礼における国民的主体の創出』は、以上のような論点について検討することを通じて、森有礼の思想と行動についての再考を試みたものである。御一読いただければ幸いです。



はせがわ・せいいち

1960年大阪府生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士。後期課程単位取得満期退学。博士（教育学）（京都大学）。現在 相愛大学教授。

森有礼における 国民的主体の創出

長谷川精一著

【10月中旬刊】

初代文部大臣としても知られる森有礼は、大日本帝国憲法発布式典の当日に刺客の凶刃に倒れた。生涯のうち、およそ4分の1を西洋で暮らした彼は、列強ひしめく世界の中で、「日本は、また日本人はいかにあるべきか」を模索した。

本書は彼の言説や行ってきた政策の目的が、日本国民の主体の創出にあったという視点から、これまで先行研究の大半が十分に検討してこなかった外国語の史料や文献をも利用し、さまざまな角度から検討を加えた画期的な一書。

〔内容目次〕

序 章

第1章 森有礼における国民的主体

第2章 森有礼の外交論

第3章 森有礼の「簡易英語」採用論

第4章 森有礼の歴史観

第5章 森有礼の道德教育論

—『倫理書』における「自他並立」の原理

第6章 森有礼の国家論

第7章 森有礼の天皇観

結 章

▶A5判・470頁／定価9,450円

ISBN978-4-7842-1367-2

はせがわ・せいいち…1960年大阪府生まれ。1985年京都大学法学部卒業。1992年京都大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学。2004年 博士（教育学）（京都大学） 現在、相愛大学教授。

「封建」・「郡県」再考

東アジア社会
体制論の深層

張翔・園田英弘共編

中国と日本の知識人による「封建・郡県」をめぐる対話の歴史を再検討する。中央と地方の関係だけではなく、秩序と規範、教育と学問、自国と外来勢力、科挙制と身分制、家族とコミュニティの構造、官僚制、さらに議会民主制などの視角もとり入れた論考13篇を収録。国際日本文化研究センターで行われた共同研究の成果。

▶A5判・412頁／定価6,825円

ISBN4-7842-1310-4

日中戦争から世界戦争へ

永井 和 著

華北に利権を求める日本。イギリス・アメリカ・ソ連を相手にしてどのような対応をしたのか。日本が世界戦争への道を歩んでゆく姿を明らかにする一書。〔内容〕東アジア二〇世紀史の中の日本／日本陸軍の華北占領地統治計画について／日中戦争と日英対立／一九三九年の排英運動／日中戦争と帝国議会／日中戦争と陸軍慰安所の創設／江口圭一論

▶A5判・516頁／定価7,980円 ISBN978-4-7842-1334-4

西洋化の構造 黒船・武士・国家

園田英弘著

サントリー学術賞

「蒸気船の時代」から始まった日本の近代化の特質と諸相を明かし、従来の近代化論に一石を投じる。

〔内容目次〕1 西洋化の外部環境（「極東」の終焉 黒船前史／蒸気船ショックの構造）2 西洋化の深層（海防の世界—共有世界の成立と展開／郡県制の武士—武士身分解体に関する一考察）3 西洋化の諸相（森有礼研究・西洋化の論理—忠誠心の射程／E・S・モースのニューイングランドにおける知的環境—アマチュアと専門家）

▶A5判・380頁／定価7,875円

ISBN4-7842-0801-1

政教社の研究

中野目徹著

「国粹主義」を主唱して明治の思想界をリードした政教社の存在形態を三宅雪嶺・志賀重昂・内藤湖南らの人物像と組織及び機関誌の全貌を検証し、政教社がこころみた実践運動と思想の展開をあとづける。

▶A5判・340頁／定価7,350円

ISBN4-7842-0771-6

増補・改訂 西村茂樹全集

（社）日本弘道会編／古川哲史監修 【全10巻】

西村茂樹の思想は、『日本道德論』に述べるように儒教と哲学の精粹を探って日本の国民道德の基礎としつつも、蘭学・英学にも通じ真理を世界に求めて一局に偏することを戒め、日本道德の確立と道德を学問として体系化することにあった。本全集では、西村の学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道德論』の初版本など思想史的にも貴重な著書が初めて公刊される。道德学、哲学、論理学、社会学など、西村思想の真髄に迫る。

〔既刊4冊〕A5判・平均780頁（ISBN4-7842）

第1巻 著作1 定価17,850円（-1189-6）

第2巻 著作2 定価17,850円（-1212-4）

第3巻 著作3 定価19,425円（-1255-8）

第4巻 著作4 定価17,850円（-1317-1）

貴族院と立憲政治

内藤一成著

明治から大正前期にかけての貴族院を主導し「官僚系」「山県系」などといわれた院内会派、幸倶楽部、及び子爵議員を中心とした最大会派、研究会の動向を中心に分析し、政党研究にくらべ著しく立ち遅れている貴族院に研究のひかりをあてた一書。また同時期の内閣・政党の動向を重ね合わせ、近代日本における立憲政治の実態、構造を探索する。

▶A5判・438頁／定価7,980円

ISBN4-7842-1278-7

フェノロサ社会論集

山口静一編

鑑画会の組織、日本画推進運動を興し、政府美術取調委員として東京美術学校設立に加わったことで著名なフェノロサだが、来日当初の目的は東京大学でミル、スペンサー、ヘーゲルなど社会思想を講じることだった。本書では日本の学会誌や新聞・総合雑誌に発表された政治・経済・社会・宗教・哲学・比較文化論等に関する主要な論文・講演13篇を収める。

▶A5判・330頁／定価8,190円

ISBN4-7842-1028-8

日中戦争についての歴史的考察

明石岩雄著

日中戦争の全面化は、太平洋戦争への決定的転換点であった。またその結果は、日本の対中国政策の破綻でもあり、ともに、中国市場の全面的開放と開発という、国際資本の試みの挫折といえる。本書は、日中戦争の原因について歴史学から考察する。

▶A5判・352頁／定価5,775円

ISBN978-4-7842-1347-4

史料探訪

30

よみがえった戦国在地領主の甲冑

山内治朋

愛媛県歴史文化博物館

伊予の中世史の研究は近年盛んに展開されているところであるが、果して現存する実物資料はというと必ずしも豊富とはいえないのが実情である。古文書・武具・工芸品・生活道具など、いずれを見ても当時のまま完形で伝世するものは数限られている。伊予の中でも、中部では守護河野氏に関連する資料などが他地域よりは比較的良好に伝えられているものの、伊予の西南部の約半分を占める南予地域にあっては中世資料の残存状況は極めて少ないと言わねばならない。とはいえ、それは本当に残存していないのではなく、確認されていない、あるいは一般に公開されていないだけなのかもしれない。そんな考えを持ちながら、南予地域の西予市に所在する博物館の学芸員として、地域資料の発掘を常に心掛けているところである。それらの成果の一つとして、企画展「戦国南予風雲録」(10/6～12/2)と題し、南予の中世から近世への移行期に関連する資料を収集し、紹介する展示を当館にて開催予定である。ここでは、その展示資料のうちの一つを紹介することとする。

これは、伊予灘に面する現大洲市長浜町にあった滝山城の城主久保氏の子孫で、新谷藩領喜多郡今坊村庄屋のもとに伝わった甲冑、紋柄威五枚胴具足／銀箔押帽子形兜(個人蔵・当館保管)である。鎧は、浅葱糸毛引威を主として、前は紅糸威、後は色糸威で吉祥紋で知られる州浜紋をあしらった紋柄威である。一見すると二枚胴のようでもあるが、実は内側に付けられた蝶番の位置から、前・後・左・右2枚の胴を合わせた五枚胴であることが判明する。写真でも胴正面から脇に差し掛かる所で少し筋目が入っているのがお分かりいただけるだろうか。また、前後立挙一段目に三つ巴紋入りの小さな鉾が打たれているのも特徴的である。兜は銀箔を施し、僧侶のかぶる頭巾の一種である帽子をかたどった帽子形兜である。この甲冑は、細部を調査すると、近世初頭にかけて発達していく当世具足の様式を備えている一方で、中世末に見られた様式も併せ持っており、まさに移行期の甲冑の様式の変化を見る上でも興味深い資料の一つといえる。また、久保氏はあくまで在地小領主であり、この甲冑も大名道具のような豪華さはないが、移行期の在地領主の甲冑の残存例としても貴重である。より詳しい内容を知りたい方は、資料紹介の論考を本企画展の図録に掲載したのでご参照いただきたい。

この甲冑には、収納保管用として文化年間に作成された鎧櫃がある。この鎧櫃に施された墨書によると、戦国末期の当主久保行春の所用と記されている。また、寛政年間に大洲藩命により編纂された大洲・新谷両藩の地誌「大洲旧記」の今坊村の部分にも、庄屋家に鎧と旗が伝存する旨が記されている。鎧は、「城主の時より伝来、紋すはま、甲は別の品といふ」とあり、まさしく州浜紋をあしらったこの鎧のことであろう。そしてそれは城主、すなわちまだ滝山城主の立場にあった戦国期から代々伝来したものと伝えられていたことも分かる。また、この鎧と組み合わせられたものではない兜が伝存していたともあるが、おそらくはこの帽子形兜のことであろう。

実は、この甲冑が発見された当初は、汚損や破損が著しい状態であった。それを、県内在住の日本甲冑武具研究保存会評議員のご指導・ご協力を得るなどしながら調査を進めた結果、上記のような貴重な資料であることが判明し、また清掃や修理を施すことで写真のように往時の姿を窺うことができるほどの形によみがえらせることができた。貴重な地域資料の一つを見出し、後世



紋柄威五枚胴具足／銀箔押帽子形兜
(個人蔵・愛媛県歴史文化博物館保管)

参考



流旗(個人蔵・愛媛県歴史文化博物館保管)

へ伝えるための手を施し、そして今回初めて一般に公開するにいたったわけである。

ちなみに、久保氏に關係する武具類は他にも数点伝わっており、それらも戦国期に遡る貴重な地域資料であり、今回合わせて初公開する。一つは麻製の流旗で、寸法670mm×303mm、上段に熊野三所権現・日吉山王・八幡大菩薩・住吉大明神・祇園牛頭天王・天満自在天神の六神仏、中心に「三」の文字、続いて上がり藤の紋、中に「八十」の字が入る。「三」は伊予のおおやまづみじんじゃ宮大山祇神社の意味であろう。字や模様は全て手書き。「大洲旧記」に見える旗とはこれのことであろう。消耗品といえる旗

が現存する珍しい事例である。もう一つ、刀・脇差という刀剣類もある。刀は銘があり、「備州長船祐定、永正十六年吉日」とある。銘「祐定」は記録上では多数存在し、個人銘としての作刀だけでなく工房銘のような使われ方で大量生産されたものもあるようである。作風からは大量生産的に作った部類に属すると推定される。脇差は無銘である。作風からは室町後期から江戸前期頃という長期にわたるような様子がうかがえるため、作刀期は判然としにくい。江戸前期の磨り上げの可能性もあるが定かではない。

こうした地域の資料を発掘し、公開していくことは、地域の過去、現在、そして未来を考えるよい材料となるはずだ。今回の企画展を機に、今後少しでも南予地域の資料の掘り起こしが進むことを期待したい。また近隣の方には企画展に是非足を運んでいただき、戦国という時代から南予という地域を見つめ直す機会としていただけたら幸いである。

—MEMO—

戦国南予風雲録——乱世を語る南予の名品——

会 期 平成19年10月6日(土)～12月2日(日)

中近世移行期の伊予西南部(南予地域)ゆかりの資料を特集し、武将ゆかりの品々、合戦にまつわる古文書、近年調査が進む中世城館遺跡の遺物、人々の生活文化を垣間見ることができる資料などを紹介し、会期中様々な関連イベントも行います。

(展示予定資料) 重要文化財 豊臣秀吉像((財)宇和島伊達文化保存会蔵)

展示期間 [原本] 10月6日～10月21日

[模本] 10月23日～12月2日

重要文化財 銅鐘(高麗王朝時代製作)(出石寺蔵)

〒797-8511 愛媛県西予市宇和町卯之町4-11-2 愛媛県歴史文化博物館 TEL 0894-62-6222 FAX 0894-62-6161

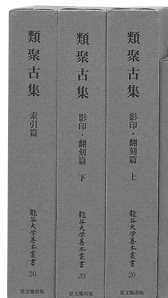
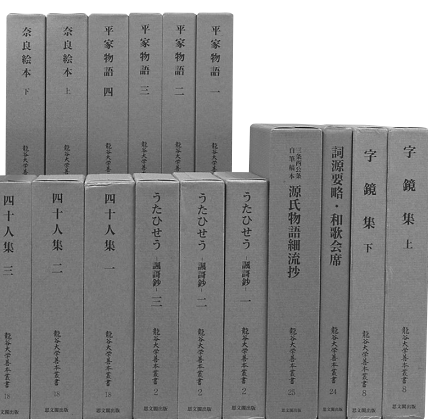
URL <http://joho.chime-iinet.or.jp/rekihaku>

載している。

『善本叢書24』として刊行した『詞源要略・和歌会席』は、影印した両作品とも室町期の儒学者清原宣賢の自筆本で、しかも『詞源要略』は天下の孤本でもある。宣賢は本願寺第十世の証如上人（一五一六―一五五四）の『天文日記』にもその名が見えており、影印した両自筆本も証如上人と宣賢との親交の中で本願寺にもたらされたことが推察される。

引き続き出版した『善本叢書25』には三条西公条（一四八七―一五六三）による『源氏物語細流抄』の自筆稿本を取っている。当該書は公条の父実隆の『源氏物語』の講義を聞きした公条自筆の草稿本聞書であって、長年公条が大切に手元に置き、注の増補修訂を行った跡の窺える貴重な伝本である。しかし、草稿本ゆえに解説し難い箇所も多いが、叢書ではこれを影印し、翻刻を付けて公開した。

この度『善本叢書26』として出版した『太平記』は、巻一―巻十二までの室町末期の写本である。『太平記』全四十巻の内の三分の一に満たない零本ではあるが、天正本系統の貴重な伝本の一つである。



以上、国文関係の既刊の善本叢書について述べてきたが、公開した作品の多くは龍谷大学図書館に収蔵している寫字臺文庫本である。當寫字臺文庫は、本願寺歴代宗主の蒐集した蔵書の全てを、明治二十四年と三十七年の二度にわたって、龍谷大学図書館に移管したものである。従って、当文庫の蔵書が本願寺に入った経緯については、当然のことながら時の宗主との関係が深く、清原宣賢自筆の両本も先に述べた如くである。『うたひせう』の場合は、その注釈担当者の一人であった山科言経の日記『言経卿記』に、寫字臺文庫本『うたひせう』の書写状況が記されているが、山科言経と第十二代本願寺宗主の証如上人とは親交があり、その関係から本願寺にもたらされたものと推察される。

その他、『源氏物語細流抄』や『四十人集』等の蔵書も時の宗主やその周辺の人との関係で本願寺に入ったことが考えられる。當善本叢書は今後この寫字臺文庫本の貴重書を中心に、禿氏文庫他の個人文庫の資料的価値の高い善本を逐次公開していく予定である。

（龍谷大学文学部教授）

太平記

龍谷大学善本叢書26

大取一馬責任編集

【最新刊】

南北朝期の内乱を題材として描いた『太平記』全40巻は、混沌とした流動的な時代の状況とその時代を生きた人物をみごとに描写しており、また後世に与えた影響も甚大である。しかし、『太平記』はその分量も多く、細部にわたって比較検討することがこれからの課題であり、学界では影印公開し、資料を提供する必要に迫られている。

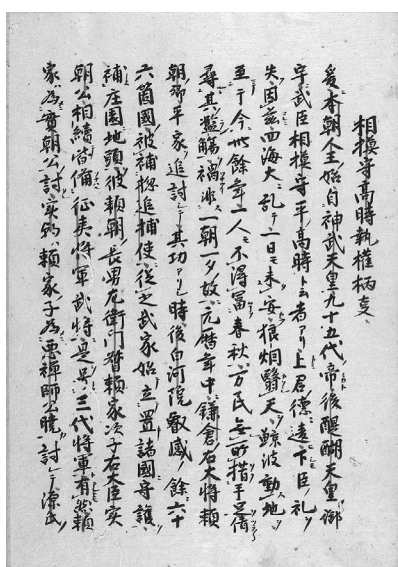
龍谷大学図書館所蔵の『太平記』は、室町時代末期の写本で、巻1から巻12までの12冊である。現在の分類では内類の天正本系統に分類され、国立国会図書館蔵義輝本と同じ祖本をもつ伝本であるという位置づけがなされている。また当該本は寫字臺文庫本の一つである。

全冊を影印で収録。解説：加美宏・浜畑圭吾。

▶A5判・784頁／定価15,750円

ISBN978-4-7842-1365-8

（写真：巻第一 相模守高時執権柄事）



『龍谷大学善本叢書』について

大取一馬

『龍谷大学善本叢書』は、龍谷大学図書館蔵書の内、真宗・仏教・真宗史・東洋史・国文の五部門の資料的価値の高いものを選び、解説を付して影印出版し、広く学術研究に資せんとするものである。本叢書の刊行は、貴重書の保存と利用の両面からの要請でもあるが、その刊行の経緯については、当時の龍谷大学仏教文化研究所所長であった武内紹晃教授の「刊行の辞」に詳しい。それによると、昭和五十一年に図書館からこの研究と編集の依頼が仏教文化研究所にあり、この企画を研究所では指定研究第一部門に据えて研究を進め、五年間の調査研究を経て第一巻を出版したものである。以来現在に至るまで、二十六巻を刊行している。

本叢書の内、国文関係は思文閣出版で刊行することになっており、『うたひせう—諷調鈔—』（『善本叢書2』）をはじめとして、この度刊行した『太平記』（『善本叢書26』）まですでに九巻を刊行している。

既刊の九巻の内、国宝の『類聚古集』（『善本叢書20』）は中山侯爵家にあったものが、後に本派本願寺大谷家に伝えられ、更に平成五年になって大谷家から龍谷大学に譲渡されたものである。

『善本叢書2』として出版した『うたひせう』は、関白秀次の命に依って文禄四年（一五九五）三月に始まった謡曲注釈事業の成果である。当図書館本はその奥書や書入れから見ると、丸山吟庵によって慶長三年三月から同五年四・五月頃までに書写されたものと推察される写本で、古活字本乃至整版本『謡抄』の刊行より早い時期の写本として意義深いものである。

『善本叢書8』の『字鏡集』は、寫字臺蔵書の目録では「和玉篇」として記載されている字書で、当図書館本は室町期写の伝本の中でも善本の一つである。

また『善本叢書13』に入れた『平家物語』は、十二巻十二冊で、奥書に「沙門寛一」の署名がある写本である。平家諸本の中、語り本系統の覚一本の中でも最善本とされる伝本である。『日本古典文学大系』（岩波書店刊）所収の『平家物語』の底本に用いられている。

また『善本叢書18』として影印した『四十人集』は、平安時代歌人の私家集集成で、小澤蘆庵の下で天明・安永期に書写・校合したものである。いわゆる蘆庵本私家集の一群である。その写本の中には蘆庵が校合し、仮名遣いを訂正した書入れもあって、蘆庵仮名遣いの実際が見られる。

『善本叢書22』として刊行した『奈良絵本』上・下二冊には、『ふじの人あな』『志加物語』を含め八点の作品を影印している。その八点の作品は寫字臺文庫本の他にも中川文庫本（中川浩文元龍谷大学教授旧蔵本）や禿氏文庫本（禿氏祐祥元龍谷大学教授旧蔵本）の個人文庫からの貴重書も収

龍谷大学善本叢書

龍谷大学が所蔵する貴重典籍を影印で紹介。国語・国文学研究上重要な資料を学界に広く提供する。

うたひせう—諷調鈔— [全3冊]

宗政五十緒責任編集 龍谷大学善本叢書2

▶ A5判・総1700頁／揃定価35,700円

①ISBN4-7842-0420-2 ②ISBN4-7842-0421-0 ③ISBN4-7842-0422-9

平家物語 [全4冊]

大取一馬責任編集 龍谷大学善本叢書13

▶ A5判・平均520頁／定価44,100円 ISBN4-7842-0794-5

四十人集 [全3冊]

家郷隆文責任編集 龍谷大学善本叢書18

▶ A5判・総2100頁／定価50,400円 ISBN4-7842-0970-0

類聚古集

[全3冊]

秋本守英責任編集

龍谷大学善本叢書20

▶ B5判・総1800頁／定価59,850円 ISBN4-7842-1041-5

詞源要略・和歌会席

大取一馬責任編集

龍谷大学善本叢書24

▶ B5判・290頁／定価19,950円

ISBN4-7842-1196-9

三条西公条自筆稿本 源氏物語細流抄

安藤 徹 責任編集

龍谷大学善本叢書25

▶ B5判・706頁／定価29,400円

ISBN4-7842-1234-5

【品切】

字鏡集[全2冊] 龍谷大学善本叢書8 秋本守英責任編集

奈良絵本[全2冊]

龍谷大学善本叢書22 糸井通浩責任編集

『源氏物語』が初めて記録にとどめられたのは寛弘五年（一〇〇八年）十一月一日、道長邸で催された敦成親王誕生による五十日の祝いの折であった。一条天皇の第二皇子、母は道長娘の中宮彰子、道長にとっては初孫、将来天皇に就けて自らの政治的な基盤を固める上においても、特別な存在であった。その慶事と権力を見こしての大勢の公卿たちの参列、にぎやかな宴会、酔っ払った人々のざわめきが夜遅くまでくり広げられる。

『紫式部日記』によると、歌人としても名の知られる左衛門督中納言藤原公任が、少しほろ酔いかげんで、紫式部など女房たちがひかえているあたりを訪れ、「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ」と声をかける。紫式部をからかおうとしたのであるうか、彼女は『源氏物語』にこのような人はいないのにと、返事もしないでおし黙っていた。

この直後、中宮の内裏遷啓にともない道長邸では大々的に『源氏物語』の書写をするという「御冊子作り」があり、日記によると翌年には一条天皇が「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ」と感想を述べたと記す。「作者は歴史を熟知している」との称賛のことばであり、これによって〈物語〉が漢文の記録や漢詩に匹敵する地位を持つにいたったといえよう。それまでの〈物語〉は、絵入本が中心だっただろうが、女性や子供の対象から、公任がそうであったように、成人男性も正当な文学として評価するようになったのである。

『源氏物語』が『紫式部日記』の寛弘五年の条に見えるとはいえ、成立したのはそれ以前だったはずで、その後も継続して書かれたのか、すでに全巻終えていたのかは明らかでない。その考証

〈新企画〉 源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第一回〉

千年読みつがれた古典



伊井春樹

(国文学研究資料館館長)



伊井春樹 (いい はるき)

国文学研究資料館館長、大阪大学名誉教授。著書『源氏物語注釈史の研究』『成尋阿闍梨母集全釈、私家集全釈叢書17』『源氏物語注釈書・享受史事典』『物語の展開と和歌資料』『ゴードン・スミスが見た明治の日本』など。

〔ご案内〕 伊井春樹先生ならびに国文学研究資料館のご協力もいただく公開講演会・シンポジウム「私の源氏物語」を来たる11月4日(日)に行います。詳細は20頁をご覧ください。

はともかく、それから一千年、途絶えることなく読み継がれてきた歴史は驚嘆すべき現象というほかはない。世界的な古典として評価されるシェイクスピアといえども、十六世紀後半から十七世紀の人物であり、紫式部からすると六百年以上も後のことになる。しかも光源氏や紫上など多数の個性を持った登場人物と複雑な物語の展開、四百字詰め原稿用紙に換算すると二千三百枚余の大長編、鎌倉期の『無名草子』に「思へど思へどこの世一つならずめづらかに覚ゆれ。誠に仏に申し請ひたりけるしにやとこそ覚ゆれ」と、紫式部は仏の加護によって書いたのかと疑いたくなるのも至当であろう。そこから、紫式部は尋常な人間でないとか、いや観音の化身ではなからうか、などと作者を神格化していくことにもなる。

現代の私どもも作品に魅了され、不可思議な存在にあらためて畏敬の念さえもいだく。なぜこれほどまでに『源氏物語』は時代を超えて読み続けられるのか、〈源氏文化〉の諸相をたどること、現代の古典再生の道を探っていくことにする。

(つづく)

京都源氏物語地図

角田文衛 監修／加納重文 責任編集／社団法人紫式部顕彰会 発行

11月下旬刊行

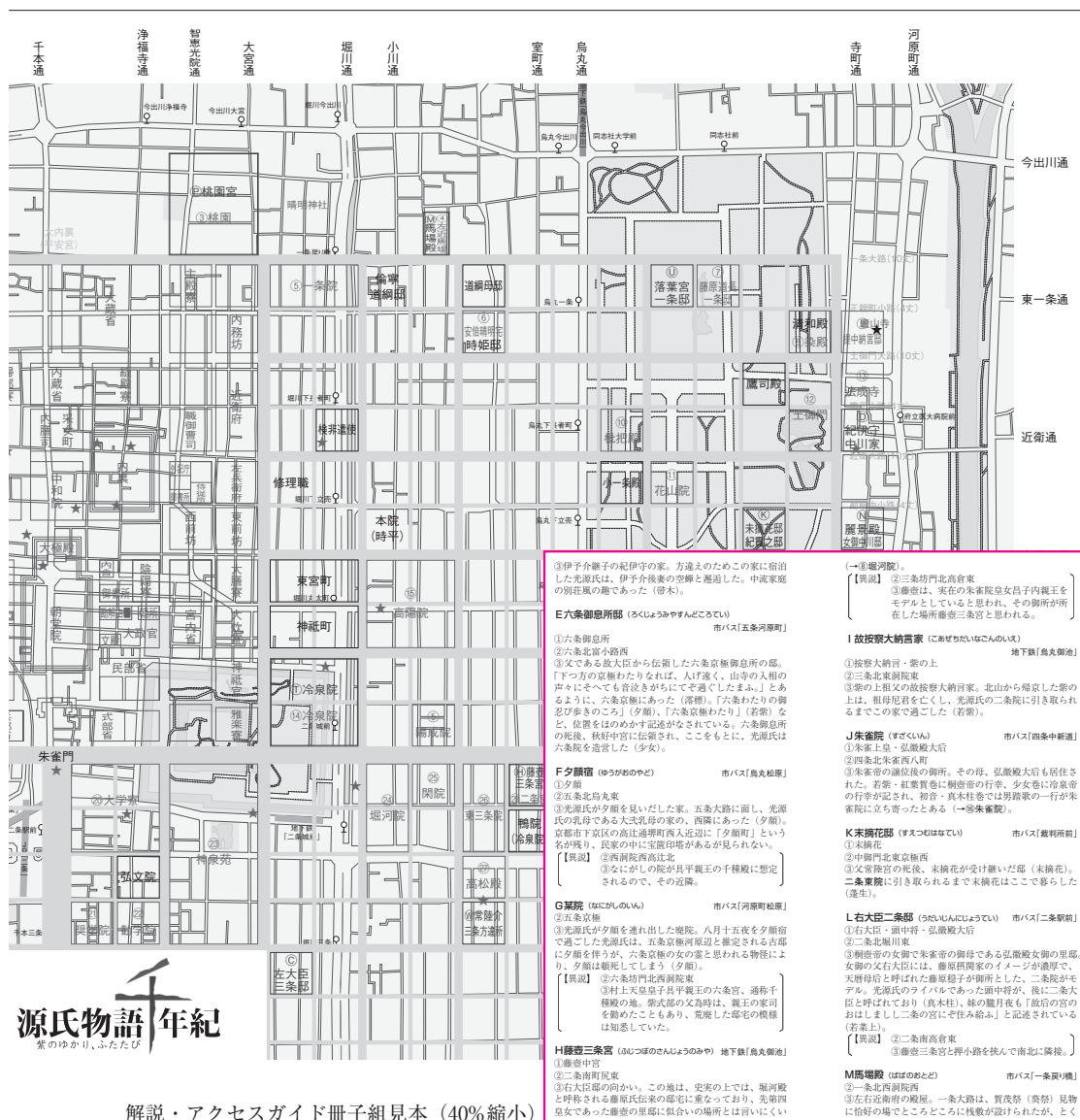
現在の地図に平安京復元条坊を重ね、源氏物語ゆかりの邸宅などを配置。
散策に最適なハンディタイプの地図1枚に、案内をかねた小冊子つき。

定価840円（送料：3冊まで150円、4冊以上は通常の小社規定によります）

ISBN978-4-7842-1372-6

▶地図：A2判（594mm×420mm）1枚（表・平安京内地図 裏・京外地図） 解説・アクセスガイド冊子：105mm×297mm／32頁

●地図見本（50%縮小）●



Rethinking Bernard Leach:
Studio Pottery
and
Contemporary Ceramics:
by
Edmund
de Waal
&
Kenji Kaneko

スタ
ジオ・ポ
タリ
ー
と
陶
芸
の
現
代

バーナード・リーチの再考

エド
モンド・
ワール
著

東京国立近代美術館工芸課長
金子賢治 監訳・解説
お茶の水女子大学准教授
鈴木禎宏 解説
東京国立近代美術館工芸課研究員
北村仁美 訳
茨城県つくば美術館主任学芸員
外館和子 訳

日英両国における近代的な個人作家としての陶芸家の登場、アーツ・アンド・クラフツ運動や民芸運動といった思想運動の系譜など、さまざまな議論を孕んだ存在となったバーナード・リーチ。現代英国を代表する気鋭の陶芸家であり、批評家でもある著者による真摯な愛情に基づく鋭い批判的論評。第一線の専門家による解説を付し、本書全体を通じて現代陶芸論を試みる。

- 目次
❶ 第1章 素朴な力1887-1920／第2章 日用陶器1920-1940／第3章 ルーツを求めて1940-1979／第4章 東と西を超えて
❷ 癒しと再生—陶器の真の生命／陶芸—新たな歴史の必要性
❸ 対談・解説

▶ A5判・288頁／定価5,040円

ISBN978-4-7842-1359-7

稲賀繁美編 伝統工芸再考 京のうちそと

過去発掘・
現状分析・
将来展望

和服や仏壇が海外で作られる現在、「工芸」の将来を見据えて国際日本文化研究センターで行われた共同研究の報告書。「伝統」「工芸」の捉え直しから、日本および東アジア工芸の近代史、美意識や価値観の葛藤、経営・流通、工芸の現在、将来への展望など、気鋭の美術・工芸・文化・経済・行政の専門家および実作者36名による論考。生き方とも関わる「ものづくり」の意味を問う。

❖ 目次 ❖

I「伝統」の諸相／II 東西の往還／III モダニズム美学と装飾デザイン／IV 東アジア工芸の近代／V 美意識の相克と価値観の葛藤／VI 経営と流通の国際的変貌／VII 伝統工芸の現在／VIII 将来への展望

▶ A5判・880頁／定価13,650円

ISBN978-4-7842-1357-3



祭りのしつらい

【10月中旬刊】

町家とまち並み

岩間 香・西岡陽子編／京極 寛写真

祇園祭・天神祭をはじめ、城端（富山県）や大津・倉敷など各地の祭り飾りや造り物などをとりあげ、町家とまち並みを飾る祭りの文化を紹介。歴史・絵画史料にみる祭りの変遷と、本書紹介の祭礼をカラー60頁に収録。

《内容》

座敷を飾る—神像・家宝・造り物—（西岡陽子）
絵画に見る祭りのしつらい

—屏風と襖敷—（岩間 香）

屏風祭の戦後60年

—祇園祭の宵山飾り—（谷 直樹）

祭りのしつらいと町家・町並み

—大津・日野・奈良井—（増井正哉）

祭りの住文化とまちづくり

—城端・倉敷・村上—（碓田智子）

都市祭礼の最前線—大阪天神祭—（中嶋節子）

造り物の諸相—大坂を中心に—（西岡陽子）

祭礼百選

▶ B5判・200頁／定価2,310円 ISBN978-4-7842-1360-3

布がつくる社会関係

インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌

金谷美和著

染色業者カトリーと彼らの生産する布について民族誌的記述を行い、布の生産・使用によって構築される社会関係について論じる。

▶ A5判・336頁／定価6,510円 ISBN978-4-7842-1341-2

中国文人画家の近代

西槿 偉著

豊子愷の西洋美術受容と日本

中国近代を代表する文人・芸術家、豊子愷が日本を通して西洋美術を受容したことの意義を問うと同時に、「文化の越境者」豊子愷の本質に迫り、20世紀日中知的交流の軌跡を検証。

▶ A5判・384頁／定価5,775円 ISBN4-7842-1230-2

三藐院 近衛信尹 残された手紙から

前田多美子著

本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」として日本書道史上にその名を謳われてきた近衛信尹の生涯を彼の残した手紙から読み解き、隠れた素顔を明らかにし、信尹の書を改めて考えなおす。

▶ A5判・270頁／定価2,415円 ISBN4-7842-1299-X

瀬戸内海地域社会と織田権力 (評) 地方史研究57巻4号(須藤茂樹)	布がつくる社会関係 (紹) 月刊 染織α 2007年8月号
長崎奉行の研究 (評) 史学雑誌116編8号(松方冬子)	日本産業技術史事典 (紹) 日本経済新聞8/5朝刊
相国寺蔵西笑和尚文案 (記) 京都新聞8/29朝刊	(紹) 信濃毎日新聞8/12朝刊

8月に刊行した図書

図 書 名	編 著 者 名	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
伝統工芸再考 京のうちそと 江戸時代唐船による日中文化交流 古代日本の生命倫理と疾病観(2刷)	稲賀繁美編 松浦章 大星光史	1357-3 C3072 1361-0 C3022 1245-0 C3027	07042999 07042997 05026419	086617200 086616900 0569091	08162786 08162778 05618566	13,650 9,450 3,675	8 8 8

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

❖❖❖各紙誌にて続々紹介❖❖❖

【朝日新聞 9月9日 朝刊読書面】

幕末・明治の初めから1980年代まで、日本の発展を支えた産業技術の変遷を、民間の現場における蓄積に光を当ててまとめた『日本産業技術史事典』が刊行された。生活や工芸の道具、機械と素材、銅や石炭産業、船、鉄道、自動車、航空機、通信から環境技術、教育、開発機関など、23の大項目と344の小項目に分類して、総計120人が執筆している。創意工夫を重ねて世界に誇る技術を開発した先人たちの歩みが凝縮されている。

【会議所ニュース(日本商工会議所発行) 9月11日】

本書は、幕末・明治初年から1980年代までの、近代工業の成立と定着の時代について、日本における産業技術史を俯瞰する事典だ。近代化以前からの「草の根」の技術と技能の蓄積に光を当て、民間の現場の力を重視。総勢120人の執筆者により、近代のあらゆる営みに密接にかかわった産業技術の全容を明らかにしている。世界の中で存在感をなくし、進むべき方向を探しあぐねている私たちの未来を照らす、先人たちの歩みを紹介した一冊。



▶ B5判・550頁／定価12,600円 ISBN978-4-7842-1345-0

▶ていーたいむ余録◀

「袖振り合うも多生の縁」といいますが、早島大祐先生とは10+α年前の高校時代、JR京都駅前のバス乗り場が隣同士でした。それから幾星霜……、このたびご縁があり、「文殊の会」の京大古文書室の定例勉強会や琵琶湖合宿にもお邪魔させていただきました。

そこで驚いたのは、同世代の研究者の方々が真摯に研究に取り組む姿！ 今回の座談会でも、皆さん熱心に研究への前向きな思いを語って下さいました。

この若手研究者の方々の頑張りを見守っていただき、10年後の成長・活躍ぶりを楽しみにしていただけたらと思います。(R)

▶表紙図版◀

方相氏・疫鬼(『政事要略』巻29)

(斎藤英喜『陰陽道の神々』より)

▶営業部より一学会販売◀

学会シーズンになりました。仕事で様々な学会に本の販売に伺いますが、出店の際、同様に出版している他の出版社の本を見るのはなかなかおもしろいものです。どの出版社も学会に応じた本を持ってきますので、書店では見ることができない本を見つけると、おもわずうれしくなります。大きな学会では、本を買いに学会に来られる方もいらっしゃるかと。

わたくしどもも学会の発表内容に即した本も持っていますが、思い通りにならないのが現状。売れると予想していた本が、全然売れなかったり、その逆に、意外な本が売れていたり、一喜一憂の繰り返しです。その中で、既刊書の新たな魅力を発見することもあります。お近くで学会が開かれる際には、書籍の販売ブースも見いただけると幸いです。(I)

源氏物語千年紀記念 思文閣創業70周年記念

公開講演会・シンポジウム

私の源氏物語

平成**19**年**11**月**4**日(日) 午後1時～5時(開場0時30分)

講師・
演題



山折哲雄氏

(国際日本文化研究センター名誉教授)
基調講演

「源氏物語の宗教性」



中井和子氏

(京都府立大学女子短期大学部名誉教授)

「源氏物語の表現方法」



川本重雄氏

(京都女子大学教授)

「源氏物語と寝殿造」

シンポジウム
司会



伊井春樹氏

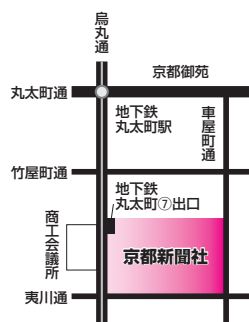
(国文学研究資料館館長)

会場＝**京都新聞文化ホール**

(京都市中京区烏丸通夷川上ル)

定員＝**350名**／**入場無料**

要申込み(先着順)



主催＝思文閣出版
京都新聞社

共催＝国文学研究資料館
森永エンゼル財団

後援＝源氏物語千年紀委員会



京都新聞文化ホール

中京区烏丸夷川上ル京都新聞社 7F

※地下鉄丸太町(7)出口より
エレベーター上がる(駐車場なし)

申込み方法＝ハガキ、ファックス 075-222-2200 に郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の上、
〒604-8567(住所不要)京都新聞 COM 広告局企画部「源氏物語シンポジウム」係へ。

関連催事

◎特別展示「源氏物語」の世界―石山寺の名宝展―

11/2(金)～11/18(日) 9:00～19:00 入場無料

於：株式会社思文閣 本社、ぎやうらい思文閣

(京都市東山区古門前通大和大路東入)

お問い合わせ：075-531-0001

主 催：株式会社思文閣・京都新聞社

◎細川護貞公を偲ぶ 永青文庫特別展―大観勅題画を中心に―

11/3(土)～12/16(日) 10:00～17:00

於：思文閣美術館 (京都市左京区田中関田町2-7)

入場料：一般700円、高大生500円、小中生300円

主 催：思文閣美術館・京都新聞社

特別協力：財団法人永青文庫

後 援：京都府・京都市・京都府教育委員会・

京都市教育委員会・京博連・KBS京都

お問い合わせ：075-751-1777

株式会社**思文閣出版**

〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7 ☎075-751-1781(代) FAX.075-752-0723

http://www.shibunkaku.co.jp/ e-mail: pub@shibunkaku.co.jp